〈書評論文〉

移民の国　日本

── エスノナショナリズムの社会における移動と帰属 ──

Gracia Liu-Farrer,
Immigrant Japan:
Mobility and Belonging in an Ethno-nationalist Society
（Cornell University Press, 2020）

韓　　在　賢

1. はじめに

本稿で扱うのは、早稲田大学大学院教授・アジア国際移動研究所所長を務める Gracia Liu-Farrer の著作である。在日朝鮮人や日系人、日本人男性とフィリピン人女性の間に生まれた子どもたちの存在にも関わらず、日本は単一民族主義的なエスノナショナリズム国家と認識されている。しかし、日本は「移民の国」だと言い切ったのが本書である。本書の中心的な問題関心は、なぜ移民が日本に留まることを選ぶのか、彼らが「非移民」社会でどのような関係性を構築するのかということだ。これらを明らかにするため、移動を促す要因である法的制度、経済、人間関係だけでなく、心理的な要因である「帰属 belonging」を分析概念に導入する。著者は 150 人に及ぶ在日外国人（1 世、1.5 世代、2 世）にインタビューを行い、エスノナショナリズム国家を前提とする日本の政策や制度の問題性を指摘するとともに、「我々 us」として受け入れられることのない在日外国人の帰属意識、アイデンティティを丁寧に描く。

以降、第二節では各章について概観し、第三節で本書の意義及び筆者の分析を記す。本書の構成は以下のとおりである。序章では日本の移民受け入れの経緯、「移民国家」の定義、エスノナショナリズム国家日本の現状や問題、さらに本書で登場する概念について先行研

究を基に詳細に書かれている。1 章から 4 章にかけて移民が経験する日本での生活や仕事について、5 章では人々の移動の要因についてまとめており、インタビューを通して移民のリアリティに迫る。6 章では日本に住む移民にとっての家 home と帰属の語りを分析する。7 章では移民の子どもたちの学校経験、8 章では子どもたちの葛藤や複雑なアイデンティティを明らかにする。そして結論には本書のまとめと今後の日本の課題及び可能性について著者の意見が記されている。

2. 各章の概観

2.1　エスノナショナリズム国家における移動

序章では、日本政府の移民受け入れの経緯、エスノナショナリズム国家における移民現象の特徴を記している。1980 年代に国際化の名のもと外国人労働者の導入を進め、ここ 30 年ほどで日本の門戸は大きく開いたが、2018 年時点の外国人人口は全人口の 2%と非常に少なく、現在に至るまで日本政府は移民政策を打ち立ててこなかった。著者はエスノナショナリズム国家であるという自己認識と伝統的な「移民国家」の定義のために日本が移民国家として認識されないのだと推測する。

日本のエスノナショナリズムは、共通の血統というイデオロギーを基盤にした国民を作り出すためのものであり、現在においても単一民族主義のディスコースは移民に対する嫌悪の主要な理由として強調されている。このディスコースは、外国人の流入を拒絶せずとも「彼ら they」を「我々 us」と区別する目に見えない壁として機能しうる。著者は、このエスノナショナリズム的なアイデンティティが移民を対象とした制度の不整備や社会的ジレンマの根源であることを明らかにした。

ここで、日本を移民国家として捉えるために、著者は「移民国家」のステレオタイプ的な像を見直す必要があると主張する。アメリカは、建国の歴史や移民に対する寛容な法的枠組みの点で移民国家とみなされているが、移動の流動化によって移民国家の認識の薄いアジアやヨーロッパ諸国にも移民が増えている。EU に至っては、地域内であれば自由に人々は国境を横断できるためもはや「移民」という概念を当てはめられなくなっている。そこで、「移民」という概念そのものを考え直す必要があり、「移民国家」という用語は単に「外国籍の人々に入国するための多様な法的チャネルと永住のための制度的な枠組みを与えるような国」とするべきだと結論づける。

最後に、著者は日本に固有に見られる 4 つの特徴を挙げている。一つ目は移民に対する根拠のない拒否である。政治的ディスコースにおいて、移民はタブー視され、一時的な労

働力としかみなされない。二つ目は時代錯誤の制度的実践である。教育システムから雇用システムに至るまで日本の制度は移民のニーズや期待に沿うものでない。三つ目は移民の実用主義と定住の過程である。あくまで彼らの定住は偶発的なものであり、経済的な機会や愛着の有無、社会への定着、ライフコースの段階によって決まるため、日本が非移民国家であるという認識は移民たちの定住を阻むのである。四つ目は、日本への帰属は可能である（しかし困難である）が日本人のアイデンティティを持つことは不可能なことである。エスノナショナリズム国家でも、外国人が日本社会に対して帰属意識を持つことは可能であるが、「日本人」として彼ら自身を認識することは非常に困難であるということだ。例えば、「在日（朝鮮人）」の3世は、「ヒスパニック系アメリカ人」のように「韓国系日本人」というアイデンティティを持つことはできず、「日本に住んでいる」というアイデンティティのみ所有している。こうした特徴は日本への定住を妨げ、日本が移民国家として認識されない原因となっている。

こうした歴史、日本の移民の特徴を明らかにした上で、以降、現在の日本に滞在する外国人の語りが続く。第1章では日本への移住のパターンを挙げている。日本は移民国家というイメージが欠落しているにも関わらず、外国人にとって多くの機会に恵まれた国だと著者は指摘する。1980年代はバブル経済の時代でもあり、多くの外国人労働者や留学生が渡日した。日本のファッション、漫画、アニメなどの大衆文化に対する情熱が日本での留学や就業、結婚を促すが、中には家族や社会的な抑圧から逃れるために渡日する者もいた。また、中国や韓国からの学生は将来のキャリアアップを見越して留学する者が多かったという。著者は、渡日する人々の動機は単なる経済的な地位の上昇ではなく、経済状況、文化、就業(キャリア)、人間関係など様々であることを明らかにした。

第2章では日本の移民の多様なチャネルと出身国別の移民の特徴をまとめている。1980年代、日本政府は非熟練労働力の受け入れを認めない一方で、「サイドドア」として結婚移民やエンターテイナー、日系人を受け入れた歴史がある。一方で、日本がグローバル化に対する努力を示した証が留学生だったと著者は分析する。近年では、エンジニアや教授など専門知識を有した高度人材も増加しており、日本は国際競争力を維持するためのグローバルな人材を求めるようになったと指摘する。

第3章では移動戦略を分析している。彼らの移動戦略のバリエーションには3つの特徴があると著者は主張する。一つ目は低賃金労働、第二次産業、さらにグローバルに活躍する高度熟練労働者にまで至る、日本経済における移民の多様な役割だ。二つ目は出身地によって社会経済的移動の不均等が見られることだ。ある国の出身者は第二次労働市場から第一次労働市場へと移ることや起業に挑戦することができる一方で、第二次労働市場に留

まり続けることしかできない者もいる。例えば、日系ブラジル人は代々工場労働から抜け出せずにいるが、中国人や韓国人は高度な日本語や日本人とのコミュニケーションを学び、比較的容易に社会移動が可能であることが指摘されている。三つ目は、移民は日本経済と外国市場を橋渡しし、隙間市場を探し出す存在であることだ。彼らは日本経済で生き延び、栄えるためだけではなく、グローバリゼーションのエージェントとして行動するために彼らの特異な能力を使うのである。

第 4 章では、日本で生活する移民がいかに人生を紡いでいくのか記述している。移民の選択は決して確固たるものではなく、彼らの将来の軌道や意志は常に揺れ動いていると著者は主張する。日本には 150 万人をこえる永住者や帰化者がいるが、その多くは偶発的で不確かな過程で定住を決意しており、インタビューでは、日本パスポートの利便性や子どものいじめを理由に帰化を決断する様子が確認できる。これらの理由を「どうしようもない事情」と語ることから、彼らは帰化することによって得られる国籍とアイデンティティを同一視していないことがわかる。

移動するのか留まるのか、選択を決定づける要因を第 5 章では論じている。ビザの期限、キャリア、人間関係の希薄さなど去る理由は様々だが、著者は日本企業の問題も指摘している。日本企業は「グローバル人材」として外国人を雇用し、彼らに日本の会社環境への同化を求めるが、昇進のスピードの遅さや自分の能力を全く活かすことのできないジョブローテーションがグローバル人材の移動を促してしまうのだ。さらに、感情的な要因も移動を促進させるが、結婚や家族という親密な関係は特に影響力が大きいという。一方で、日本の生活習慣や文化的実践への慣れは日本への滞留や帰還を促す要因となると指摘する。さらに、日本で勉強して働いた経験がある移民 1 世が祖国に帰った後、2 世により良い教育を受けさせるために、子どもたちを日本に送る現象も見られる。

著者は、人々の移動は制度的条件と手段、感情が複雑に絡まりあって起きるのであって、政策や法律では制御することができないと結論づける。さらに、経済的な要因と感情的な要因が相互に影響し合うことを付け加える。

2.2　エスノナショナリズム国家における帰属

前章までは移動の側面から移民を見てきたが、以降は個人の内面に着眼していく。第六章では、home と belonging の語りから移民がいかに日本に愛着を持つのか分析している。著者は 150 人以上の移民に「あなたは日本に家という感覚を持っていますか。」「あなたはどこに帰属している感覚がありますか。」という 2 つの質問を投げかけている。日本を家と感じている人たちは、文化的な実践や社会環境、友人や家族に対して愛着を持っており、

それを家と表現した。また、日本に帰属している感覚があると答えた中で、かなりの人が家族や職場など「自分の身の回りに対してのみ」感じている一方、納税など社会的な行動を通して帰属感を持つ場合もある。他方、祖国を家と感じる人、限定的に帰属を感じる人、ハイブリッドな帰属感を持つ人、重層的な帰属意識を持つ人も見られる。著者は場所を伴わない「脱空間的な帰属」に着眼し、現代において社会空間の「脱領域化 deterritorialization」が起きている可能性を示唆する。この中に、家族がいる場所を家だと思う人や自分自身の能力や自由を堪能できる場所を家だと感じるコスモポリタンな帰属を持つ人を分類している。著者は移民こそ新たな社会空間を創造することができる存在だと期待しているが、彼らの帰属意識は一貫性があるものとは言えず、状況に翻弄されるものだとまとめている。

中には、日本の文化・習慣に慣れ親しみながら日本への帰属を持ち始めるが、スティグマによって日本に対して完全な帰属を得られない人も存在する。彼らは「文化的な語り[1] cultural narrative」を強調し、どれだけ日本語を流暢に話せても自分は日本人ではない、日本に対して帰属意識を持てないと語る。彼らの個々人の語りは代表性が担保されるわけではないが、語りに見られる違いから、世代や国籍、教育課程、社会経済的な背景によって考え方が異なることが示唆される。

第七章では2世や1.5世、ハーフ（ダブル）といった子どもたちの教育達成に着目する。彼らは日本の公立学校か「外国人学校（インターナショナル学校を含む）」に通うことが多い。その選択の裏に潜む親の思惑と各学校の特徴が説明される。

単一文化的な日本人を養成する公立学校において子どもたちは、見た目や名前の差異、日本語使用の困難から生じるいじめ、日本人の文化・振る舞いへの同化を経験する。いじめの問題は深刻で、子どもたちの外国人学校への転校、通名使用を促す。また、著者は日本の文化・振る舞いを身につける中で、親の文化を継承することが困難になりつつあると指摘する。

対照的に、外国人学校の主な目的は、親の国に帰るための教育を施すことである。その例としてブラジル人学校が挙げられているが、ブラジルの教育水準も日本の教育水準も達成できていないという問題が発生している。一方、日本にとどまりながら言語、文化を継承することを目指すネパール人学校では、日本の大学に進学できるよう日本語教育にも力を入れている。

---

[1]「日本は島国だから外国人を歓迎しない。」など日本のエスノナショナリズム的な特徴を述べる語りを指す。

日本と祖国の教育を織り交ぜてグローバルな人材に育てたいと願う親は多く、日本で教育を受けながら、親の国に留学して文化・言語を獲得することもある。しかし、戦略的に継承語を教えない親もいる。著者は、子どもが継承語を話したり読めたりすることを誇りに思う一方で継承語で会話しないという親の相反する態度が、母国は日本よりも「劣等である」という意識から生じていると分析する。将来は不透明であるため、親は子どもたちのために選択肢を作っておきたいと願い、戦略的になる。こうした教育戦略、学校での経験、移動の結果が子どもたちの自己認識を形成するのだ。

では、教育戦略を実践している子どもたちに焦点を移す。第八章では日本で育った1.5世、2世の子どもたちの語りを中心に、エスノナショナリズムの国で他民族として、日本のアイデンティティを獲得して生きる子どもたちの経験が書かれている。彼らは複合した文化・社会環境に囲まれているため、それらの文脈との関係性を常に調節し、彼らの主体性を修正する必要があると著者は指摘する。さらに国籍は強力にアイデンティティを形成するため、彼らは日本と親の国籍、パスポートに記された国籍との間でアイデンティティに折り合いをつける必要があると付け加える。著者はインタビューを通して解明できたことを3つ挙げる。まず、日本の単一文化的な教育機関は抑圧的な環境を生み出し、パッシング行動を引き起こす。次に、複雑化、グローバル化する社会環境にさらされる中で、子どもたちのアイデンティティは進化していく。最後に、子どもたちは主体性を形成する時期に、文化、血統、帰属の不一致と多重性に直面しなければならないが、そうした環境下で、彼らはアイデンティティの選択における限定されたレパートリーに呼応するように、コスモポリタンな自己[2]を出現させる。

結論として著者は、帰属 / アイデンティティのグラデーションを守りながら、移民が「外国人として日本で生きる live in Japan as a foreigner」ことが可能になるべきだと主張している。これを実現するためには日本国家のあり方が変わっていくべきだが、著者が最も問題視しているのは日本の教育制度である。今後、移民国家として機能すべき日本に対して著者は「日本が求める人材に留まってもらうために、移民をどのように魅了するのか。」「複雑な移動が一般化する未来において社会的統合が可能になるのか。」という問いを投げかけて本書を締めくくる。

---

[2] コスモポリタンな自己は特に言語能力に特化した人だけが得られる特権的なものであって、2世や1.5世のアイデンティティをひとまとめにくくるのは安直すぎると筆者は考える。額賀（2021）はホスト国文化と出身国文化の獲得程度と帰属感をグラフにしており、移民第二世代のアイデンティティ類型を「ハイブリッド型」「出身国文化志向型」「ホスト国文化志向型」「マージナル型」の4つにまとめている。コスモポリタンな自己は「ハイブリッド型」に分類されると考えられる。

3. 移民研究における本書の意義と分析

本書を読むと内容が散漫としていてまとまりに欠けると感じてしまうだろう。しかし、この散漫さこそが「移動」過程の複雑さを示していると考える。昨今の移民研究のフィールドとして労働市場、結婚（家庭）、教育現場が特に多く見られるが、1世はライフコース（労働、結婚）と移動に関する研究が多く、2世は学校経験、アイデンティティに関する研究が蓄積されつつある。著者は自らが来日した移民1世であり、ニューカマー2世に分類される子どもを養育する母でもあるため、移民が複雑で連続的な現象であることを肌で感じているはずだ。だからこそ移民という現象を多角的に分析し一冊に統合する挑戦をしたのではないだろうか。この挑戦を本書の意義として評価したい。

さらに、日本という国家のあり方と移民政策に対する意見を本書の結論でまとめているが、その中でも「外国人として日本で生きる」という観点は、日本社会に外国人を包括する上で非常に重要な意見だと考える。著者が「外国人として」と表現した理由は、あくまで筆者の分析だが、在日外国人が帰化せずとも「国民（日本の構成員）」として承認されるべきだと仄めかすためであり、本書を通してエスノナショナリズムこそが在日外国人を国民から排除する要因だと主張しているのではないだろうか。承認は国家レベル、コミュニティレベル、個人レベルで作用すると考えられる。国家レベルの承認は「国籍」であり、エスノナショナリズムが特に強く働くのはコミュニティや個人レベルの承認であると推測される。外国人が国家からの承認である日本国籍を取得しても、血統を起源とするエスノナショナリズムがコミュニティからの承認だけでなく、本人の「日本人」としての承認をも妨げるのだ。これこそが、著者が見つけ出した矛盾、つまり多くのインタビュイーが自分の中に「日本人らしさ（Japaneseness）」を見出しているにも関わらず日本に完全な帰属感を持てないことのメカニズムであると考える。

エスノナショナリズムによる排除は「参政権」にも現れている。日本国憲法第15条において参政権は日本国民に限定されている。日本国民の定義は国籍法で非常に細かく定義されており、基本的に父母の血統、もしくは無国籍が条件とされる。つまり、参政権を持たない永住者や特別永住者を含む在日外国人は国民ではないことが憲法に明記されているのだ。この事実が露呈したのがコロナ禍の水際対策[3]であり、国民に含まれない在日外

---

[3] 2020年4月3日以降日本国籍および特別永住者を除くすべての在日外国人が日本を出国した場合、再入国を許されなかった。2022年9月26日にはすべて撤廃された。（https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri01_00136.html）

国人は反対する余地もなく、日本の家に帰る権利を奪われた[4]。著者は帰属の政治 politics of belonging に伴って権利の問題が付随すると指摘する。「外国人として日本で生きる」ことが実現しても彼らへの参政権の付与は今後問題になるだろう。

ところで、本書では日本側から見た移民に対する態度は書かれていない。日本人の外国人への態度に関しては次のような議論がある。金（2015）は「単一民族国家」という概念は民族浄化を肯定する思想であるとして批判しており、同化主義と排外主義が表裏一体であることを明らかにした。一方で、永吉（2018）は外国人との共生に対する日本人の意識を調査し、日本人は外国人に対して完全に同化を求めるわけではなく、むしろ彼らの固有の文化を守ろうとする点で寛容である可能性を示唆した。これらを考慮すると日本を頭ごなしに移民に排外的であると批判することはできない。Fukuyama が包摂的なナショナル・アイデンティティの感覚が、現代の政治秩序をうまく機能させ維持するのに欠かせない（2019:179）と述べるように、日本は多様な人々を包摂しうる新たなアイデンティティを確立する必要があると考えられる。それをどんなアイデンティティにするのか、著者の意見に耳を傾けて我々は考え続けなければならない。

参考文献

金 明秀, 2015,「日本における排外主義の規定要因：社会意識論のフレームを用いて」『フォーラム現代社会学』14（0）: 36-53.

永吉 希久子, 2018,「日本人の多文化社会に対する意識」『東北文化研究室紀要』59: 35-47.

額賀美紗子, 清水睦美, 児島明他, 2021,「日本社会の移民第二世代－エスニシティ間比較でとらえる『ニューカマー』の子どもたちの今」明石書店

Francis Fukuyama, 2018, *IDENTITY–THE DEMAND FOR DIGNITY AND THE POLITICS OF RESENTMENT*, , London : Curtis Brown Group Ltd.
（山田文訳, 2019,『IDENTITY　尊厳の欲求と憤りの政治』朝日新聞出版.）

（はん　じぇひょん・修士課程）

[4] 帰化すれば血統に関係なく日本国民になれるのだが、元の国籍を捨てることは人によってはそれほど簡単ではない（と筆者も実感している）。